

第 部門

水辺環境の保全と再生に関わる市民活動に対する大学ゼミの参画

摂南大学大学院	学生員	○濱	和義
摂南大学大学院	学生員	出原	啓司
摂南大学工学部	非会員	山本	智志
摂南大学工学部	非会員	道上	功
摂南大学工学部	正会員	澤井	健二

1. まえがき

近年、水辺環境の保全や再生に関わる市民の関心が高まり、大小さまざまな団体による活動が展開されている。しかし、その活動を進めるに当たって、志はあっても資金、人材、時間の確保が困難なことから十分な活動ができずにいることが少なくない。これを解決するには、市民団体同士の連携や市民と行政の協働さらには企業の参画などが期待されるが、学術機関としての大学や学会の支援も有効であろう。とりわけ、若いエネルギーの集団である大学生の参画は市民活動に大きな推進力になることが期待される。

摂南大学工学部都市環境システム工学科水辺環境創出研究室（澤井ゼミ）では、1997 年からそのような活動に取り組み、寝屋川市内を初め、大阪府域さらには琵琶湖・淀川流域圏内のあちこちにおいてローカルな活動支援と流域ネットワーク的な活動支援を進めてきた。本報告は、そのいくつかを紹介するとともに、これらの活動の現状と課題について考察を行うものである。

2. 淀川愛好会の発足と流域水環境交流会

淀川愛好会（Yodo River Club）は、淀川に学び、親しむとともに、河川美化、流域交流の促進を目的として、1997 年 4 月、摂南大学澤井ゼミを拠点として発足した。当初は、会員数 10 数名の学生サークルであったが、同年末に市民サークルに発展し、会員数は 240 名に増加した。初年度は、河川清掃に参加するのがやっとであったが、年度末に「淀川討論会」と題して 50 人規模の討論会を企画し、98 年度に「E ボート」と呼ばれる 10 人乗り組み立て式手漕ぎカヌーを購入してからは、それを活用した「フィールドワーク」と「淀川討論会」を継続するとともに、年に 4 回、「YODORIC NEWS」と称する会報を刊行し、2000 年度からはホームページも開設している。（<http://www.setsunan.ac.jp/civ/yodoric>）

99 年度に始めた「流域水環境交流会」は、7 月末から 8 月初旬にかけての土・日の 2 日にわたって行う、シンポジウムと E ボートレースを中心とする催しで、淀川流域内の諸団体に呼びかけて、毎年 10 数団体、約 200 名の参加を得、淀川流域圏の代表的な交流行事になっている。開催地は 99 年に草津市（琵琶湖）、2000 年に日吉町（日吉ダム）、2001 年に枚方市（淀川）、2002 年に吹田市（神埼川）、2003 年に奈良市・山添村（布目ダム）、2004 年に柏原市（大和川）、2005 年に和歌山市（紀の川）と流域圏内を巡回するように毎年変えており、2006 年は猪名川町・川西市（一庫ダム）を予定している。淀川愛好会の運営はほとんど澤井ゼミの学生が担っており、ボランティア活動の性格をもつ一方、教育・研究の場ともなっている。

3. 個々の地域におけるローカルなフィールド活動の支援

澤井ゼミでは、淀川愛好会の独自の活動のほかに、流域内の諸団体からの要請あるいは自主的な判断に基づいて、流域内のローカルなフィールド活動にも積極的に参画し、支援を行っている。その代表的なものをいくつか挙げると次のようなものがある。

琵琶湖（高島市）：親水行事。日野川（京都市）：ピオトープ、瀬と淵の造成、生物調査、親水行事。桂川（京北町・日吉町・亀岡市・京都市）：シンポジウム、親水行事。淀川（大津市・宇治市・京都市・八幡市・枚方市・寝屋川市・摂津市）：親水行事。寝屋川（寝屋川市）：河川清掃、生物調査、親水行事。長瀬川（東大阪市・

八尾市): 親水行事・大川・道頓堀(大阪市): 親水行事・藻川(尼崎市): 親水行事・土居川(堺市): 親水行事・石川(羽曳野市): 河川清掃, 親水行事・大和川(桜井市・柏原市・松原市・堺市): 河川清掃, 親水行事・大阪湾(高石市): 親水行事・

4. 広域活動への参画とNPO事務局の運営

澤井ゼミではローカルなフィールド活動のほかにも, 行政やNPO主導の水環境保全・再生へ向けた広域的な活動にも参画している。参画している団体として寝屋川流域ネットワーク, 大阪子どもの水辺ネットワーク, 桂川流域ネットワーク, BYQネットワーク, NPO法人近畿水の塾などが挙げられる。

大阪子どもの水辺ネットワークは未来を背負ってたつ子どもたちのために, 行政, 教育, 地域住民, 学識者, 企業など各界の人々が協力して支えていくための集まりである。地域の自然や環境, 歴史や文化などの暮らしの中の身近なところから「子どもの水辺活動」を考え, 情報や経験の共有をはかり, 「総合的な学習の時間」を支援するなど, 地域に根付いた「子どもの水辺体験・学習活動」を推進している。澤井ゼミでは設立当初から参画しており, 現在も役員として運営等に関わっている。

BYQネットワークは市民, NPO, 学校, 研究機関, 企業など琵琶湖・淀川流域で水環境に関わる人たちの相互の情報交換をスムーズにし, 流域内交流を促進させるために, (財)琵琶湖・淀川水質保全機構が設立したもので, BYスタンプラリーなどの事業を行っている。澤井ゼミでは淀川愛好会としてBYスタンプラリーに協賛しており, またBYスタンプラリー運営会議に積極的に参加している。

NPO法人近畿水の塾は水環境に関わるシンポジウムなどの実行委員に自発的に参加していた市民, 行政職員, 団体職員, 会社員等が, 回を重ねるごとに仲間の輪を広げていき, 1996年にネットワーク団体「近畿水の塾」を設立し, その後, 近畿圏における流域内連携及び流域間連携活動の拠点としての, より多様な活動展開を目指すため, 任意団体からNPO法人「近畿水の塾」に発展した。現在, 事務局が澤井ゼミ内に有り, 運営等に関わっている。

5. ワークショップの運営支援

寝屋川市では, 2001年に市の中央を流れる寝屋川を再生しようという動きから, 「寝屋川再生プランワークショップ」が開かれ, 市民を対象に30人のワークショップ委員が募集され, 結果62名の応募があった。その中には市民団体会員のほかに摂南大学澤井ゼミとエコシビル部の学生が数名含まれていた。現在も「寝屋川再生ワークショップ」と名を変え継続されているほか, この活動を継続的かつ自発的なものにしていこうと, 「ねや川水辺クラブ」というネットワーク組織が立ち上がり, 澤井ゼミでは親水部会を受け持っている。澤井ゼミではその専門性を活かし, 単に親水活動にとどまらず, 環境面, 治水面でも知識や労力の提供を惜しまず, 頻繁に市役所や市民との連携をとっている。例えば, ワークショップで提案された寝屋川市駅前の親水空間について, 市民や行政の方が検討を進めやすくするためのツールとして立体模型を作成したり, 移動床水理模型実験を行って現象の予測を行うなどの支援を行っている。他にも「私たちの日野川をつくるワークショップ」や「BYQネットワーク交流会」などの場で, 専門性を活かした運営支援を行っている。

ワークショップにおいては, 数名ずつのグループに分かれて, 模造紙上にポストイットを貼りながら議論を進めた後, 全体発表で各グループの代表がその模造紙を用いて発表する事が多いが, 参加者が多いときには模造紙の文字が見づらく, 発表がよく理解出来ない場合があった。そこで澤井ゼミではこの解決策として, ビデオカメラで模造紙上のポストイットを撮影し, プロジェクターでリアルタイムにスクリーンに投影する手法を考案し実行したところ, 大変わかりやすいプレゼンテーションになり好評を得ている。

6. あとがき

水辺環境の保全と再生には, 技術的な側面からのサポートが欠かせない。大学をはじめとする研究機関は, その役割を担うだけの力量があり, 市民団体, 行政は大いに協力を求めることが有効である。また大学をはじめとする高等教育機関には次代を担う世代の若者が多数おり, 市民活動に参画することによって社会ニーズを把握し答えるだけでなく, 心豊かな人間形成においても, また人的つながりの形成においても有効である。